

店のカウンターの中でも、乗り物の中でも、読書に費やす時間はかなり長いと思うが、わたしが読書に一番集中できるのは、いつのころからか日帰り温泉の大広間になった。

月に1度は足を運ぶT湯では、大食堂と休憩室が分かれているため、休憩室の大広間は、仮眠している人たちがほとんどで、とても静か。読書するにはぴったりの環境なのだ。

朝10時ころ入館して、まずはビール、入浴、昼食、ごろごろ、入浴をして、だいたい午後1時ころになると、やおらバッグから本を2、3冊取り出して、テーブルの上に積み上げてみる。ぜいたくな午後のはじまり。さて、きょうは、どの本から読み始めようか！

読み始めると、本の世界に入ってしまうので、そのうち自分がどこにいるのか忘れてしまう。重松清の「疾走」という、かなり重い主題を扱った長編小説を数時間かけて読み終わったとき、わたしは深い海の底にいた。しかしふと、ここは温泉だと気づいて、即〈ゆ〉に直行し、湯船にとびこんだ。まるで、あたたかい涙に浸かっているようだった。

あるとき、近くのテーブルで参考書を開いて必死に勉強している高校生らしき男子がいた。彼もきっと、この大広間で集中できるにちがいない。

夢中はたしかに伝染する。わたしはその日、飲み食いをそっこのけで、読書だけに集中した。いつの間にか日が暮れて、大広間には高校生とわたしの、ふたりだけになっていた。